

和 なごみ

「清明」

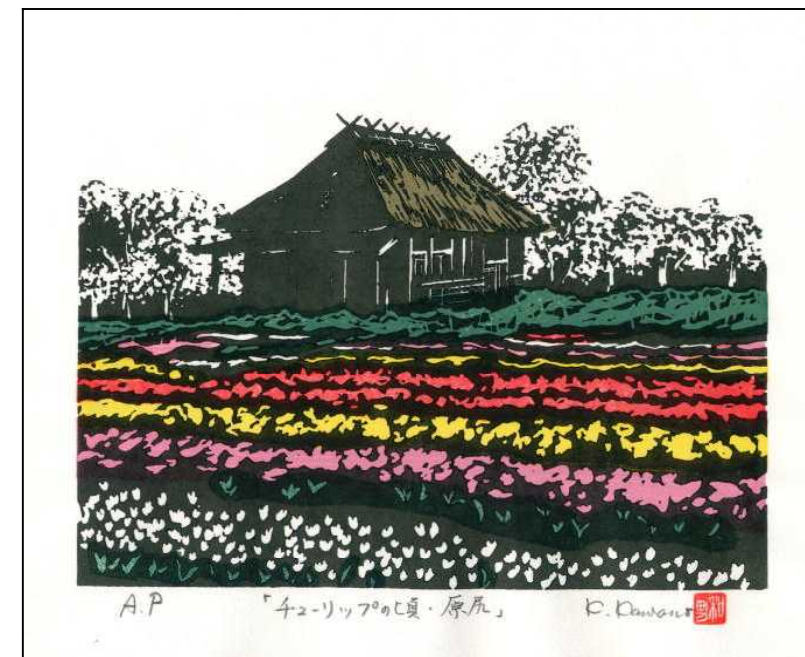
久住の嶺々に 今年によく降った雪が残り
 水辺には 猫柳が絹の様な柔らかな花をつける
 庭先に 沈丁花の香が漂い
 畑の隅には 桐の花が咲き始める

春 四月五日は清明

未だ肌寒さも残る 爽やかな頃
 草木が芽吹き 万物が清新な気に満ちてく

る

そんな大地の力と華を 形に表せるような仕事を



旬の版画

すっかり春の風物詩とな
 った緒方のチューリップ
 一つ一つ可愛い花も
 いっぱいと
 押し寄せて来るようで
 生命の力強さを感じます

せんてい
剪定ばさみ (庭師のワンポイントアドバイス)
 「竹」

和風庭園において竹は、松と並んでもっ
 とも調和する草木の一つといえます。造園
 には、黒竹、大名竹、金明竹、金明モウソ
 ウ竹などが多く使われます。しかし、地下
 茎が広がり、庭園の景観を損なう事がある
 ので、作庭時に地中をコンクリートブロッ
 ク等で囲むなどの対策が必要です。



また、竹は、植栽だけでなく素材としての用途も
 多様にあり、箆、籠などの生活用品や、建築資材、
 特に造園資材には多く用いられます。
 竹垣もその一つで、四つ目垣、建仁寺垣、金閣寺垣、
 銀閣寺垣、竜安寺垣、桂垣、鉄砲垣、など多種多様
 で、用い方も様々です。
 竹は、和風庭園には無くてはならないものです。

一建落着



M邸 (長湯)

玄関に目隠しも付いて完成です。
 お茶が趣味というお施主さんの
 希望で水屋もしつらえました。
 和19の **川野組 ING** と
 併せてご覧下さい。



Y邸 蔵(竹田)

「町並み環境整備事業」で、
 歴史のある蔵が、ガレージとして
 きれいに復活です。

『和』を読んでの
 ご感想を
 お聞かせ下さい。

発行人 川野和男
 編集 川野組内
 家造り匠の会
 ☎ 竹田62-2416
 メール tkk22@theia.ocn.ne.jp

ちょっと季になるお話

「さてさて、今日来た夫婦は新築かな？それともリフォーム？」人間の話ではありません。これはツバメのお話です。

うちの工場には、毎春幾組ものツバメの“つがい”が訪れては梁や桁に巣を作り子育てをします。これが夏の初めまで続くのですが、この巣作りが面白く、新しく作り始める新築派と、古い巣を修復するリフォーム派がいるのです。

「古い巣を利用するなんて、ちゃっかりしたやつも居るもんだ。まさかツバメにもリサイクルが広がってる？あるいは古民家再生？」と思っていたのは的外れ。



実はこれ、ツバメ特有の帰巣本能に依るもので、親ツバメは前年に自分が作った巣に、子ツバメは親ツバメの巣の近くに新しく作るのだそうです。軒下など人の生活圏に巣を作るのは、人の力を借りて、ネコやヘビなどの外敵から巣を守るためです。「燕が巣を作る家は栄える。」という“言い伝え”を耳にした事があると思いますが、「人が居るからツバメが巣を作る。」という事かもしれません。それでも生存率は、30%~40%、2年目には更に下がって10%~20%と、非常に低く、自然の厳しさを思い知らされます。

燕の子安貝の話が、『竹取物語』に登場するように、昔から日本人の近くにいたツバメ。気を許すと頭に落ちて来る糞爆弾は困りものですが、それはそれ、仕事の合間に巣を見上げては雛の成長を確かめる毎日は、なかなか楽しいものです。でも、「あの巣がウミツバメの巣だったら・・・」とってしまうのは私だけ？

里山探訪 やまの恵みたち

突然ですが、秋子、寒子、春子ってご存じですか？えっ、女性の名前ですって・・・

それでは、冬菇(どんこ)香子菇(こうこ)香信(こうしん)、いかがですか？

前者はシイタケの収穫時期、後者は品柄による呼称です。

かつて1ドル360円の時代、冬菇は農産物輸出品の花形商品でした。

今では円高などのため、中国産に押されていますが、安心、安全の地元シイタケ、今が旬の春子シイタケ、美味しいです。

新緑、そして山菜のシーズンと、これから山が最も輝く季節に入ります。



椎茸ご飯
美味しいですよ

休景たいむ 「いっぷく」時間の一枚



これは、竹田上町の『吉川屋』さんの屋根からの景色です。土色に舗装された通りを隔てて『羅夢歩』さんから小池さんへと連なる美しい麓が見渡せます。

知っ得？納得！ こんな所にこんな物

栃木県の日光東照宮、その入り口近くにある神しんきゅうしゃ厩舎という建物に、8面にわたり猿の一生を描きながら「人の人生」を伝える彫刻があります。

その一つ、『見ざる 言わざる 聞かざる』は、子供の頃には悪い事は「見ない、言わない、聞かない」事とし、「素直に育てる」という教育的な意味合いを含んでいるようです。

竹田市城北町の『碧雲寺』の境内にある石灯籠の上にも、その三猿像が置かれています。

ご住職のお話では、「私が来たときにはすでにあり、何故ここにあるのかは、解らない」との事です。今の時代にあっては、「見て、聞いて、言わなければ、生きていけない」そんな時代になっているようにも思えます。

散策の折に、ちょっと立ち寄ってみてはいかがでしょうか？

